

ポーランド語の「礼儀」に関する社会言語学的考察 —謝罪表現のケース・スタディー—

川本 夢子

Badania socjolingwistyczne nad grzecznością języka polskiego: studium aktu przeprosin

Yumeko KAWAMOTO

Streszczenie

W niniejszym artykule autorka opisuje polską grzeczność językową, uwzględniając dwa aspekty. Pierwszy z nich to aspekt gramatyczny, który w języku polskim dotyczy głównie zaimków osobowych dzielących się na dwa rodzaje: grzecznościowe oraz poufale. Na podstawie towarzysko-społecznej relacji między nadawcą a odbiorcą tekstu językowego rozmówcy decydują o sposobie zwracania się do partnera rozmowy oraz stylu wypowiedzi, wybierając słowa odpowiednie dla danej sytuacji. Drugi aspekt to aspekt kulturowo-społeczny, którego podstawą są sfera oficjalna i nieoficjalna. Sfera oficjalna wiąże się najczęściej z relacją na *pan/pani*, a sfera nieoficjalna – z relacją na *ty*. Istnieje w polskim społeczeństwie zwyczaj językowy tzw. przejścia na *ty*, po którym zmniejsza się dystans między uczestnikami aktu komunikacji teoretycznie na zawsze. O przejściu na *ty* piszą także badacze z dziedziny lingwistyki komparatywnej oraz socjologii lingwistycznej.

Jako przykładowy akt grzecznościowy autorka przeanalizowała przeprosiny, a materiał językowy stanowią wypowiedzi postaci z polskich seriali telewizyjnych. Autorka wybrała trzy następujące pozycje: *BrzyUla*, *Magda M.* oraz *rodzinka.pl*, w których można zaobserwować zarówno oficjalną, jak i nieoficjalną sytuację komunikacyjną oraz oba typy relacji między rozmówcami – relacja na *pan/pani* i na *ty*. Charakterystyczna dla przeprosin w języku polskim jest odmienność sformułowań między wypowiedziami w relacji na *pan/pani*, a tymi w relacji na *ty*. W relacji na *pan/pani* najczęściej używane są proste i krótkie formy, natomiast relacja na *ty* pozwala rozmówcom na stosowanie bardziej rozbudowanych konstrukcji zdaniowych, na przykład dodawanie usprawiedliwienia. Można również zaobserwować, że w kontekście polskim intencja aktu przeprosin należy do osoby mającej poczucie winy, podczas gdy w społeczeństwie japońskim nadawca przeprosin często jest do nich zmuszony ze względu na niższą rangę społeczną w stosunku do rangi rozmówcy.



目次

- 1. はじめに
- 2. 先行研究における言語的「礼儀」
 - 2.1. 文法的観点からの考察
 - 2.1.1. 種類の二人称表現
 - 2.1.2. 肩書を用いた表現
 - 2.2. 社会文化的観点からの考察
 - 2.2.1. 場面の公私が言語行動に与える影響
 - 2.2.2. 人間関係と敬称・親称の選択
- 3. ケース・スタディー：謝罪表現
 - 3.1. 具体的な言語資料に基づく分析と考察
 - 3.1.1. 人間関係と言語形式
 - 3.1.2. 人間関係と謝罪の種類
 - 3.1.3. 人間関係と場面の公私
 - 3.2. 罪の意識と文化としての謝罪
- 4. おわりに

1. はじめに

外国語の学習において文法事項の理解や語彙力の向上はもちろん必要不可欠であり、その知識なしに言語を使いこなすことは不可能だが、これらは言語運用能力を支える基礎的な情報に過ぎない。最も複雑で習得に時間を要するのは、その言語が用いられている国や地域の文化・習慣によって形成された言語体系を、社会的背景をふまえて理解することであろう。中でも言葉で表現される「礼儀」に関しては言語それぞれで異なる価値観が映し出され、社会が求めるその「礼儀」の基準も言語により様々である。

筆者は外国語としてポーランド語を学ぶ立場にあるが、ポーランド語を会話の手段として用いる場合、どのような言語的「礼儀」に従うべきなのか、常に疑問を抱いている。そこで、本稿では実際の言語行動の中でポーランド語の「礼儀」がどのように反映されているのか明らかにすることを目的とし、まず第2章では先行研究で取り上げられているポーランド語の「礼儀」について、文法的観点・社会文化的観点の二つの観点からそれぞれ記述を試みる。それをふまえて第3章では具体的な言語行動の例として謝罪表現を取り上げ、筆者自身が収集したテレビドラマのセリフデータに基づく分析を行う。特に人間関係と言語形式、謝罪の種類、および場面の公私の相関関係について考察を行う。

2. 先行研究における言語的「礼儀」

本研究で扱うのは言葉の「礼儀」であり、これはポー

ランド語で *grzeczność językowa* (直訳で「言語的礼儀」) と表現される。この *grzeczność*¹ という語はポーランド語学における術語ではなく、日常的に用いられる一般名詞に分類され、筆者はこの *grzeczność* に「礼儀」という日本語の表現を用いる²。

本章ではポーランドにおける社会言語学的研究の成果を議論の基盤として取り入れ、文法的観点と社会文化的観点の二つの切り口から、現代ポーランド語の「礼儀」の全体像を捉えた記述を試みる。

2.1. 文法的観点からの考察

まず文法体系を意識した視点から、特に人称表現を中心とした言語的「礼儀」について考えたい。ここからはポーランド語の人称に関する問題を扱った Huszcza (1980, 1996) と Łaziński (2006) の研究を中心に議論を進めていく。

2.1.1. 二種類の二人称表現

ポーランド語の「礼儀」を文法的カテゴリーとして捉えることを試みた Huszcza の研究 (1980, 1996) は、日本語や韓国語といったいわゆる敬語体系が充実しているとされる言語、またポーランド語と似た言語体系を有する他のスラヴ諸語など、他言語との対照を踏まえながらの分析も含んでいる。Huszcza は言語的「礼儀」について文体・語彙・語形成それぞれの文法的観点から考察を行っているが、これらすべての要素に関

わる最も重要な文法事項が人称であり、ポーランド語の人称代名詞はコミュニケーション上の人間関係を反映するもの³かどうかによって、照応的なものと直示的なものの二種類に分けられると述べている (Huszcza 1980: 179, 1996: 97)。一人称を示す *ja, my* および指示的に用いられる *on* は特に人間関係に関する情報を伝えるものではなく照応的代名詞に分類されるのに対し、二人称に言及する場面で用いられる *ty, wy* およびその二人称の人物に何らかの形で関係する第三者を指す *on* には、人間関係を映し出す機能がある。この直示的な用法で用いられる二人称代名詞はいわゆる親称と敬称の区別によって単数では *ty* と *pan/pani*、複数では *wy* と *panowie/panie/państwo* がそれぞれ対応するものとして使い分けられ、これを整理すると図1のようになる。現代ポーランド語文法の規則に従うと、敬称として用いられるこれらの表現は動詞の三人称変化を要求し、同じくスラヴ語であるロシア語やチェコ語とはこの点において異なる⁴。以下、例として親称と敬称の差を反映させた疑問文を挙げておきたい⁵：

[1]
 Czy widział **pan** ten film?
 Q see-IMPF.PAST.3.M.SG you-MP.SG.NOM this movie-M.SG.ACC.
 (あなたは) もうこの映画を見ましたか?

[2]
 Czy widziałeś ten film?
 Q see-IMPF.PAST.2.M.SG this movie-M.SG.ACC.
 もうこの映画見た?

ここで示した通り、敬称を用いる表現で文法的には三人称の形式を取るが、実際に指し示す対象は二人称

であるため、敬称を表す名詞に続く動詞をあえて二人称変化させる表現も全く見られないわけではない。例えば市場などの場面で用いられる「レンガを買ってください⁶。」の表現について、以下二つの例文を見てみたい：

[3]
Kup **pan** **cegłę.**
 buy-PF.IMP.2.SG you-MP.SG.NOM brick-F.SG.ACC.

[4]
Niech **pan** **kupi** **cegłę.**
 let you-MP.SG.NOM. buy-PF.PRES.3.SG brick-F.SG.ACC.

ここで例として挙げた [3] の文と同じ男性形 *pan* + 動詞の二人称変化という形は特に国立学術出版所のポーランド語コーパス (Korpus Języka Polskiego PWN⁷、以下 KJPPWN) でも実際の言語データとして確認でき、主にあまり教育を受けていない人や社会的地位が低い人物の発言に多く見られる。もともと古いワルシャワ方言の特徴でもあったが、ここ半世紀でこの表現が使われることはほとんどなくなった。Łaziński は KJPPWN のデータに基づき女性形の *pani* + 動詞の二人称変化についても実際の用例が見られるとしているが、男性形の *pan* + 動詞の二人称変化という形に比べてその件数が大幅に少ないことも指摘している (Łaziński 2006: 41)。これに対し、男女混合複数形の *państwo* に動詞の二人称 (複数) 変化を用いる表現は *pan/pani* + 動詞の二人称変化の場合と異なり、むしろ本来文法的に正しいとされる *państwo* + 動詞の三人称変化よりも高い使用頻度でコーパスの言語データに表れている (Łaziński 2006: 41)。以下、[3] [4] の

図1：ポーランド語の親称と敬称

| | 親称 | 敬称 (男) | 敬称 (女) | 敬称 (男女) |
|----|----|---------|--------|---------|
| 単数 | ty | pan | pani | — |
| 複数 | wy | panowie | panie | państwo |

比較に倣って「～させていただきます／～させていただきます。」という意味の例文を二つ挙げる：

[5]

Pozwólcie państwo.
allow-PF.IMP.2.PL. you-PL.NOM.

[6]

Niech państwo **pozwoła.**
let you-PL.NOM. allow-PF.PRES.3.PL

ここで挙げた例文と同様の特に命令形を用いた誘いや提案の文脈において、文法的に正しいとされる本来の *państwo* + 動詞の三人称変化よりも *państwo* + 動詞の二人称変化が好んで用いられる傾向にある。つまり、本来は [6] が文法的に正しく、正式な用法として推奨されているにもかかわらず、文法的に誤用となる [5] の形がより多く用いられているということになる。このことから、一対一の関係で行われるやり取りでは文法的に正しい *pan/pani* + 動詞の三人称変化が主として用いられるが、相手が複数になると逆に本来は誤りだとされる *państwo* + 動詞の二人称変化がより高い頻度で用いられる傾向にあると言える。この現象のきっかけとなったポーランド人の心理やポーランドの言語文化について特に Łaziński は言及していないが、敬称の *państwo* を残しておきながら動詞は二人称変化で対等な人間関係を暗示させるというこの表現には、*państwo* と *wy* の中間地点を取ろうとする意志が反映された表現として捉えることもできよう。

2.1.2. 肩書を用いた表現

敬称として *pan/pani* などの名詞が用いられることは既述の通りだが、もともとこの敬称はシュラフタと呼ばれるポーランド貴族の肩書表現に由来している⁸。現代のポーランド語社会でもこの肩書表現は重要視される表現であり、さらに職業や役職など細かい部分にもこだわって表現するのが「礼儀」だとされている。

例えば大学の教員に対する表現は、教授、博士の学位を区別して含めるのがふさわしいとされ、敬称を表す名詞に肩書名を付けた形が呼格を取り、*panie profesorze* (*profesor* : 教授) や *panie doktorze* (*doktor* : 博士) のような呼びかけ表現が用いられる。政治家の世界でも同様に、例えば同じ議員でも上院議員には *panie senatorze* (*senator* : 上院議員) を、下院議員には *panie posle* (*poseł* : 下院議員) を用い、さらに議長には *panie marszałku* (*marszałek* : 議長) という別の呼びかけ表現が存在する。日本語では「先生」と言っておけば大概の場合問題ないが、ポーランド語ではそう簡単には片付かないのである。

これらの肩書表現はもちろん女性に対しても用いられ、その場合敬称を表す名詞のみを女性の *pani* に変え、肩書の部分は格変化しない形、つまり *pani profesor* や *pani doktor* のような表現が用いられるが、近年この肩書の部分も女性形を用い格変化させるべきだという指摘も多い。例えば *Huszczka* は「政治家」の意味を持つ *polityk* の女性形を *polityczka* とすることは無いとし (1980: 177)、これを職業や肩書の女性形が造語の対象にならない例として挙げているが、ポーランド言語文化社会学を専門とする Handke は、20 世紀後半に女性の社会的地位が上がったことで言語的にも女性の職業や肩書を表す語彙を定着させようとする傾向がみられるようになったことを指摘している (Handke 2008: 151)。これは研究者の問題意識にとどまるものではなく、ポーランドの言語文化社会で大衆の言語認識レベルでも用法が検証されるほど日常的な議論として捉えられている。職業や肩書を表す語の男性形から女性形を派生させることは文法的に可能であるが、この女性形を実際にポーランドの言語文化社会で用いた場合、元の男性形と同等の意味を示すかといえそうとも限らない。例えば「所長、部長」など組織の「長」を意味する *dyrektor* は、文法的には男性名詞でありながら男性・女性の双方を示す語として用いられる場合が多い。この語から派生した *dyrektorka* という語も存在するが、これは学校の「校長」が女性である場合に用いられる場合が多く、その他の場合は女

性にも *dyrektor* を用いるのが一般的である (Handke 2008: 151-152)。その人物を直接職業名や肩書で呼ぶ呼びかけ表現では、例えば「部長」の場合、男性に対して *pan dyrektor* を用い、女性には *pani dyrektor* を用いることで性差を表現することが「礼儀」だとされるが、職業名を示す語は男女どちらも *dyrektor* のままである。この他にも女性形の使用が社会に浸透していない語や女性形が元の男性形より劣った存在を示すとされる語など、文法的な男女平等が実際の言語文化社会に適用されない例が多く存在する。これはかつて組織の幹部に女性が含まれることはあまりなかったという歴史的事実も関係しているが、女性が社会進出を遂げた現代社会でもなお、言語的特徴としてその古い用法が抜けなまま残っているというのが現状である。近年この言語習慣を変えようとする傾向も見られるようになって¹⁰いるが、一般的な言語習慣として社会的に女性形使用が定着するためにはまだ少し時間がかかると推測される。

敬称の用法およびそれに関連する肩書表現をふまえた上で、個人の名前、特に名字と敬称の関係についてもここで触れておきたい。ポーランド語では敬称を表す名詞の後に名字だけを付け足して相手に言及することが失礼な表現として捉えられ、敬称で直接相手に呼びかける場合などは *pan/pani* + 職業名・肩書の形を用いて特に個人の名前や名字を付け足さないのが一般的である。つまり、日本語では例えば「コヴァルスキ教授」と呼びかけることができるのに対し、ポーランド語では *panie profesorze Kowalski* とは言えないのである。

2.2. 社会文化的観点からの考察

続いて、文法的規範とは別の観点から、人間関係やコミュニケーションの場といった社会的要素がポーランド語の「礼儀」にどのような影響を与えるかについて議論を進めていく。社会言語学の分野において代表的な言語的「礼儀」の研究としては Ożóg (1990, 2001) や Marcjanik (2006, 2014) の研究が挙げられ、

本節では特に Marcjanik がポーランド語の「礼儀」の特徴として強調している場面の公私および人間関係という二つの社会的要因について、先行研究の内容をもとに整理していきたい。

2.2.1. 場面の公私が言語行動に与える影響

ポーランド語話者は言語行動が観察される状況が公的なものかどうかに応じて、それぞれの言語行動における具体的な表現方法や語彙に差をつけて言語形式を使い分けており、Marcjanik はこの点にポーランド語の「礼儀」の特徴を見出している。公的な場面では全体としてまとまった意味を持つ表現が目立ち、独立した礼儀作法としての形式的な言語形式を取ることが多い。この表現の形式的性格から正直さに欠けた印象を与えてしまう恐れがあることから、公的な場面では *szczerze* 「心から」や *naprawdę* 「本当に」などの語を加え、自らの表現が形式上のものではないことを強調する傾向も見られる。一方、私的な場面では簡略化した表現の使用頻度が高くなり、外来語を取り入れた表現の使用も積極的に行われる。また若者の表現として本来の言語形式を自由に変化させたものも見られ、私的な場面ならではの遊び心を読み取ることもできる (Marcjanik 2001: 286)。

Marcjanik はこの公的・私的という基準がポーランド語の言語行動全体に適用できることを強調し、この観点からコミュニケーションの公的な層 (*warstwa oficjalna*) と私的な層 (*warstwa nieoficjalna*) の二層構造を読み取ることができると述べている (Marcjanik 2001: 287) が、この公私の層にはコミュニケーションを交わす相手との距離感も関わってくる。敬称で呼ぶ相手なのか、親称を用いる相手なのかという関係性の違いは、人称という文法上の差にとどまらず言語行動の形式そのものにも大きな影響を与えているのである。敬称を用いる相手との会話は公的な場と、親称を用いる相手との会話は私的な場とそれぞれ結びつくことが多いとの指摘もある (Marcjanik 2001: 288) が、この点に関しては本稿第3章で具体的な言語資料を分

析しつつ再度考察を行う。

2.2.2. 人間関係と敬称・親称の選択

本稿第2章1節でポーランド語の敬称にあたる表現では *pan/pani* などの名詞が用いられることについて述べたが、ここでその敬称と親称について詳しく取り上げたい。

ヨーロッパの諸言語におけるこの敬称と親称を社会言語学的な議論に持ち込んだ代表的な研究として Brown と Gilman の研究 (1960) が挙げられ、彼らの研究では敬称を V、親称を T と表記している。ただしこの表記は敬称に二人称複数形を用いる言語に関する議論を前提としたものであるため、本稿ではポーランド語で *pan/pani* などの名詞が敬称として用いられることをふまえ、以降敬称を P、親称を T と表記¹¹する。また敬称を用いる関係は P の関係、親称を用いる関係は T の関係という表現を用いる。

Marcjanik (2007) は場面の公私と並んで人間関係も言語行動の形式に大きな影響をもたらすとした上で、P の関係と T の関係についてより詳しい考察を行っている。彼女は P の関係と T の関係について「コミュニケーションの相手にとってプライベートな領域に踏み込むことができるという可能性の示唆、もしくはお互いがどこまで近づいて良いかという境界線の明示」と定義し、この P と T を決定する境界線には対称的な関係 (*symetryczna relacja*) と非対称的な関係 (*asymetryczna relacja*) があるとしている (Marcjanik 2007: 36)。ここからは P の関係と T の関係について対称・非対称の概念をふまえながらより詳しく見ていく。

対称的な T の関係では言語形式の選択を行う上で立ち位置の対等さを感じることができ、相手にとってプライベートな話題について質問するなどその個人的な領域に踏み込むことをお互いに許しているというのが一般的な認識である。この対称的な T の関係はどの年齢層でも観察されるものであるが、子供同士ではこの対称的な T の関係に限られる場合が多い。これ

は大人と違いお互いの立場に差がないことが前提として認識されているため、子供同士が初対面の相手ともいきなり対称的な T の関係で会話を進めることはきわめて一般的な現象である。これが大人同士のやりとりになると感覚に変化が起こり、初対面の相手とは P の関係から入ることが礼儀正しいとされる。しかしこれには例外も多く存在し、例えば友達の友達、といった相手の場合は初めから対称的な T の関係でやりとりを行っても特に不自然ではない。非対称的な T の関係が観察される例としては、大人が子供に向かって発言する場合 (学校における教師と生徒の関係など)、また職場で重要な役職についている人物が複数の職員に対して発言をする場合などが挙げられ、特に後者のような状況では一対一でのやりとりではなく集団と上司といった一人対複数人の関係であることが多い (Marcjanik 2007: 42)。

すでに言及した通り、初めから対称的な T の関係でやりとりできる例もあるが、大半の場合最初は P の関係を取り、そこから T の関係に移行するというのがスタンダードである。このプロセスは「*ty* への移行」(*przejście na ty*) と表現されるもので、職場や近所付き合いなどで知り合った相手と一定の間を経たのち、お互いの同意があった上で起こる現象を指す。この「*ty* への移行」はコミュニケーションを行う者のどちらか (複数人の場合は誰かひとり) が提案することで実現するが、この提案を行うのは社会的に立場が上の者、すなわち年上の者、職場での地位が高い者、もしくは女性であることが好ましいという風潮がポーランド社会に存在する (Marcjanik 2007: 43)。この「*ty* への移行」は他の言語文化社会と比較されることも多く、Marcjanik の研究 (2005) をはじめ主にヨーロッパの様々な言語文化社会とポーランドの言語文化社会を対照させた研究¹²も行われている。

Marcjanik は T の関係と対照させ、P の関係においてはお互いに踏み込んではいけないプライベートな領域が明確に示されているとした上で、特に職場での上下関係や社会的地位の違いによって対称的・非対称的な関係が生まれると説明している (Marcjanik 2007:

44)。非対称的なPの関係では、上の立場の者は下の立場の者に対してより親しみを込めた言動を取ることが許されるのに対し、その逆はポーランド語の「礼儀」に反するものとして受け取られる。例えば大学の教授と学生はお互いにPを用いるのが普通だが、教授が学生に形式的な質問として長期休暇の予定や就職活動の現況などについて話を振るのはよく起こりうることであるのに対し、学生が教授に対し同様の内容を質問するのはあまり好まれない。つまりこの場合、お互いPの関係にあるという点では平等だが、その社会的立場の違いゆえに言語で表現されるコミュニケーションの内容には非対称性が観察されるため、これは非対称的なPの関係であるということになる。一方で、対称的なPの関係は職場での上下関係などに影響されないもので、社会的役割（店員と客など）や年齢・性別による言語表現の違いは多少認められるものの、形式的な質問をするといったコミュニケーション上の権利は平等だと言える。このPの関係が何年も続く場合は次第にTの関係と類似したものになることもあるが、あくまで言語上は相手をPで表現していることもありそのコミュニケーションの内容に関してはお互いに踏み込んではいけないうプライベートな領域が保たれる。

プライベートな領域の境界線を決定するのがPの関係とTの関係であるという捉え方がMarcjanikの立場であるが、これについてJabłoński (2017) が疑問を呈している。Jabłońskiは言語形式上たとえ「tyへの移行」が起こったとしても、それが必ずしも事実上プライベートな領域に踏み込むことを許しているわけではないという可能性を指摘し、実際にはこのPの関係とTの関係の間に見られる違いはそれほどはっきりしたものではないのではないかという問いを立てている (Jabłoński 2017: 135)。これは規範としての認識が実際のコミュニケーションと直接結びつくわけではないという議論であり、Jabłońskiはこの規範と実際のコミュニケーション現場の間にずれが生じる理由を、模範として倣うことのできる決まったコミュニケーションの例が現代のポーランド語社会に存在しないこ

と (Jabłoński 2017: 135) に見出している。このPの関係とTの関係には人間関係構築の方法やプライベートな領域の定義などにおける個人差が大きく関わってくるため、規範として認識されていることがそのまま現実としてコミュニケーションの現場に適用されるとは限らないのである。

3. ケース・スタディ：謝罪表現

本章では、言語的「礼儀」を扱った日本語と他言語の対照研究でも取り上げられることの多い謝罪の言語行動に絞り、これまで見てきたポーランド語の「礼儀」に関する先行研究の内容について、実際に言語資料を分析し再検討を行う。具体的な言語資料として、ポーランドで放送されたテレビドラマ3作¹³から謝罪に当てはまると判断できるセリフを筆者が聞き取り、文字化したものを分析に使用する。これまで見てきた先行研究で強調されているポーランド語の「礼儀」の特徴として①場面の公的・私的と②相手との人間関係を軸として設定し、謝罪の場面で用いられているセリフを①と②の軸で分類することにより統計的な分析を行う。

3.1. 具体的な言語資料に基づく分析と考察

謝罪という言語行動はポーランド人が「礼儀」を表すために選択する言語行動の一つで、年代を問わず広く用いられている。Marcjanikは謝罪をその性格から二つに分類できるとし (Marcjanik 2006, 2014)、それぞれ本質的謝罪 (przeproszenia właściwe)・非本質的謝罪 (przeproszenia niewłaściwe) として説明している。本質的謝罪は、発話者自身もしくは発話者に関わる人物が一般的に常識として捉えられる範囲を超えた言動を取った場合にその状況への反応として見られる言語表現で、この本質的謝罪の原因には配慮の欠如 (zaniedbanie)、不注意 (niewaga)、注意散漫 (roztargnienie)、見落とし (niedopatrzenie)、失念 (zapomnienie)、勘違い (pomyłka) などがある

(Marcjanik 2006: 277) が、どれも自覚を伴ったものではないという点が重要である。一方で非本質的謝罪は本質的謝罪ほど発話者自らの非を強調するものではなく、言動の不適切さや不謹慎さを詫げる表現である。不適切と自覚していながらその言動を避けられない場合に用いる表現として捉えることができ、具体的には雰囲気や状況にそぐわない自らの言動を詫げる場面、個人の領域に踏み込むことや非常識な時間帯を詫げる場面、相手の期待に応えられないことを詫げる場面などで観察される (Marcjanik 2006: 279)。

本質的・非本質的を問わず、一般的に謝罪を表す表現として用いられる語は「謝る」という意味の動詞 *przepraszać* (使用頻度が高いのは一人称単数の形 *przepraszam* もしくは一人称複数形の形 *przepraszamy*) であり、この動詞に付随する形で強調の副詞や相手に対する呼びかけ表現、謝罪の具体的な原因やその内容に言及する表現、弁明の意図や自己非難を含む表現などが追加されることで、その言語形式が変化する場合が多い。若者の間では動詞 *przepraszać* と同じ意味を持つ英語の *sorry* をポーランド語風に変化させた *sory* や *sorki* のような形¹⁴が用いられることもあり、謝罪がフランクな響きを持つこともある。この動詞 *przepraszać* は相手を呼び止める際に用いたり、話の

前置きとして付け加えられたりすることもあるが、この場合は謝罪の意味を含まない表現として捉えられる。また、ポーランド語の謝罪表現には「謝る」という意味の動詞 *przepraszać* を含まないものも存在し、具体的には *wybacz* 「許して」や *nie gniewaj się* 「気を悪くしないで」などの命令形を用いた表現や、*przykro mi* 「お気の毒ですが」など与格を用いた間接的な表現が挙げられる。

以降、筆者がポーランドのテレビドラマから収集したセリフデータの中から、謝罪表現の内容を取り上げ具体的に分析を行う。ここまでの議論をふまえ、まず発言が向けられた相手との関係 (P の関係と T の関係) に応じてセリフを二つに分類し、その中でそれぞれ本質的・非本質的謝罪 (以下、本・非) を公的・私的な場面 (以下、公・私) で分類した。そこから言語形式によってさらに6項目 (① *przepraszam(y)* のみ; ② *przepraszam(y)* + 強調; ③ *przepraszam(y)* + 謝罪の原因; ④ *przepraszam(y)* + 自分の非を認める表現; ⑤ *przepraszam(y)* を用いない表現; ⑥ 英語の *sorry* から派生した表現、前置き・呼び止めとしての *przepraszam(y)*) に分け、呼び止め・前置きの謝罪も含めて¹⁵統計を取り表にまとめた (図2・図3を参照)。

図2：P の関係

| | 本・公 | 非・公 | 本・私 | 非・私 | 合計 |
|--------------------------------------|-----------|-----------|----------|----------|-----------|
| ① <i>przepraszam(y)</i> のみ | 2 | 6 | 1 | 1 | 10 |
| ② <i>przepraszam(y)</i> + 強調表現 | 6 | 2 | 2 | 0 | 10 |
| ③ <i>przepraszam(y)</i> + 謝罪の原因 | 3 | 2 | 1 | 0 | 6 |
| ④ <i>przepraszam(y)</i> + 自分の非を認める表現 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| ⑤ <i>przepraszam(y)</i> を用いない表現 | 3 | 2 | 1 | 1 | 7 |
| ⑥ <i>sory, sorki</i> | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 呼び止め・前置きとしての <i>przepraszam(y)</i> | — | 9 | — | 1 | 10 |
| 合計 | 15 | 21 | 5 | 3 | 44 |

図3：Tの関係

| | 本・公 | 非・公 | 本・私 | 非・私 | 合計 |
|-----------------------------|-----|-----|-----|-----|----|
| ①przepraszam(y)のみ | 6 | 1 | 10 | 0 | 17 |
| ②przepraszam(y)+強調表現 | 2 | 0 | 11 | 2 | 15 |
| ③przepraszam(y)+謝罪の原因 | 8 | 0 | 12 | 3 | 23 |
| ④przepraszam(y)+自分の非を認める表現 | 1 | 0 | 1 | 0 | 2 |
| ⑤przepraszam(y)を用いない表現 | 0 | 0 | 9 | 0 | 9 |
| ⑥sory, sorki | 0 | 0 | 2 | 2 | 4 |
| 呼び止め・前置きとしての przepraszam(y) | — | 8 | — | 6 | 14 |
| 合計 | 17 | 9 | 45 | 13 | 84 |

3.1.1. 人間関係と言語形式

まず注目したいのが、Pの関係における謝罪にはシンプルな表現が多いということである。図2の①と②からも読み取れるように、「謝る」という意味の動詞 *przepraszać* のみを用いた表現やそれに強調表現（強調の副詞や相手に言及する語）を加えた形式が半数近くを占めており（図2：合計44件のうち①10件と②10件で計20件）、このPの関係では言い訳をせず謝罪の気持ちをまっすぐ伝えようという意思が働いているのではないかと推測できる。ここで実際のセリフを見てみたい：

[7]

Studentka: Przepraszam. Obraziłam pana?

学生：ごめんなさい。気を悪くされましたか？

Profesor: Nie, tylko wiesz Agatko, czasami jesteś zaskakująco bezpośrednia.

教授：いや、でもねアガタ、君は包み隠さず言いすぎるところがあるよ。

Studentka: Wiem... Mam problem z inteligencją emocjonalną.

学生：わかっています…感情を抑えた表現が苦手なんです。

【rodzinka.pl 第9話】

[8]

(秘書が誤って違う部屋の鍵を渡す)

Dyrektor: Czy to jest 320?

部長：これって320？

Sekretarka: Przepraszam, panie dyrektorze.

秘書：申し訳ありません、部長。

【BrzydUla 第1話】

[7]の会話は本来感情的になって接するべきではない教授に対し、学生が感情的になり不適切な発言をしたことに対する謝罪の場面である。本稿第2章2節で大学の教授と学生は双方がPを用いるのが普通であることに言及したが、ここでは教授が学生に対しTを用いている。これにはドラマの中で学生が常に教授の家に通っていること、また家族ぐるみで付き合いがあることなどのストーリー設定が影響しており、学生に対する教授の親しみがこのTを用いた表現に反映されていると考えることができよう。学生は教授に対しPの表現を用いているため、ここでは非対称的なPの関係が成立しているということになる。謝罪そのものは動詞 *przepraszać* のみで表現され、その後には相手の様子をうかがう発言が続いている。このような発言は今回収集したセリフの中で他にもいくつか見られ、まずこの動詞 *przepraszać* だけを用いて謝罪表現を完結させた上で、相手の様子を見ながら補足的な発言を

付け足すという傾向が読み取れる。これは P の関係において存在する一定の距離感を保つための手法であると言える。[8] の会話も類似したケースで、シンプルに *Przepraszam* と謝った上で相手（ここでは部長を指す *pan dyrektor*）を呼びかけ表現で言及することにより丁寧な、謝罪の気持ちが少し強調された表現となっている。一方これが T の関係になると、より複雑な表現が目立つようになる。特に謝罪の原因に関して補足説明をする形式が多いことは図 3 の③からも読み取ることができ、動詞 *przepraszać* のみの表現やそれに強調表現が付け足された表現も用いられるが、そこからさらに発言全体として発展していくケースが多い印象を受ける。次の例を見てみたい：

[9]

Ula: Maciek, ja strasznie, strasznie Cię przepraszam za tę pracę.

Ja nie wiedziałam. To moja wina. Przepraszam.

ウラ：マチェク、本当に、本当に仕事のことごめん。知らなかったの。これは私のせい。ごめんなさい。

Maciek: Daj trochę tych pierogów i jesteśmy kwita.

マチェク：そのピエロギ少しくれよ、それでチャラってことで。

【BrzydUla 第 6 話】

[10]

Ula: Przepraszam za to wyjście. Wezwali mnie do szkoły Jaśka, mojego brata i musiałam pojechać, bo inaczej by wezwali mojego tatę. A on nie może się denerwować. Przepraszam. To się więcej nie powtórzy.

ウラ：外出してごめんなさい。弟のヤシエクの学校に呼び出されてどうしても行かなきゃいけなかったの、じゃなきゃお父さんが呼ばれるから。（血圧を下げる薬を飲んで）お父さんを怒らすわけにはいなくて。ごめんなさい。もう二度と繰り返すことはないから。

【BrzydUla 第 14 話】

[11]

Agata: Mariolo, przepraszam, że Cię nagadałam, ale to wszystko

jego wina!

アガタ：マリオラ、言いすぎちゃってごめん、でもこれは全部彼のせいなの！

Mariola: No wiem.

マリオラ：うん分かってる。

【Magda M. 第 22 話】

これら [9] ~ [11] に共通して、謝罪者の発言が全体的に長い印象を受ける。ここで挙げた例ではすべて動詞 *przepraszać* が用いられているが、その前後で強調表現や理由説明など追加情報が含まれており、謝罪をする人物によってその表現のバリエーションが P の関係のそれよりも豊富になっている。相手との関係が近くなればなるほどより具体的な説明や自分の立場を守ろうとする発言が加えられるこの傾向からは、T の関係にある相手にはより理解を求めようとする、関係が対等であるがゆえにそれが許されるという共通認識の存在を推測することができる。それに対し P の関係では、よりシンプルな形式を用い、追加説明も必要最低限の程度でとどめておくことがポーランド語の「礼儀」に則しているのではないかと考えることができる。

3.1.2. 人間関係と謝罪の種類

次に、本質的謝罪と非本質的謝罪が P の関係と T の関係でそれぞれどのように表現されているのかを見てみたい。図 2 (P の関係) では合計 44 件のうち「非・公」21 件と「非・私」3 件で計 24 件、すなわち全体の約半数を非本質的謝罪が占めているのに対し、図 3 (T の関係) では合計 84 件のうち「非・公」9 件と「非・私」13 件で計 22 件、すなわち非本質的謝罪は全体の約 4 分の 1 にとどまっており、T の関係では非本質的謝罪の件数がそもそも少ないという興味深い傾向を読み取ることができる。このことから、T の関係においては非本質的謝罪の重要度が薄れ、自らの失態を詫げる本質的謝罪に関しては P の関係と同様に言葉で謝罪を述べるのに対し、不適切であることを承知の上で

の言動に対して謝罪をするという場面は少なくなるのではないかと考えられる。状況的に仕方ないことは相手が理解してくれるであろう、もしくは対等な関係にある以上許される範囲であろうという T の関係の前提から、非本質的謝罪の存在が薄れているとも言えよう。この非本質的謝罪の例として、以下 P の関係と T の関係それぞれで見られたセリフを挙げる：

[12]

Ula: *Przepraszam, ale muszę wracać do pracy.*

ウラ：（無理な要求をする副社長に対し）申し訳ありません、仕事に戻らないといけませんので。

【BrzydUla 第 14 話】

[13]

Księgowy: *Przykro mi, ale to jest niemożliwe.*

会計係：（過去 5 年分の調査書の手配を頼むウラに対し）気の毒ですが、それは無理です。

【BrzydUla 第 7 話】

[14]

（電話が鳴り、友人との会話を中断しなければならない状況で）

Natalia: *Przepraszam Cię. Odbiorę.*

ナタリア：ごめんね、（電話に）出るわ。

【rodzinka.pl 第 11 話】

[15]

Mama: *A tu słuchajcie kochani...*

母：みんな、それでね…

Tomek: （電話が鳴る）*Sorki.*

トメック：ごめん。

Mama: *Nie, odbierz sobie spokojnie.*

母：いいの、構わないで（電話に）出て。

【rodzinka.pl 第 13 話】

それぞれ [12] と [13] が P の関係、[14] と [15] が T の関係で見られた非本質的謝罪である。[12] は

自分の仕事に戻らなければならないため相手の要望に応えられないことに対する謝罪を、また [13] は現実的に不可能だと伝える際の謝罪をそれぞれ言葉で表現している例であるが、事実上後半部分（謝罪の原因を伝える内容）のみでも状況は伝わる。ただここでは相手との関係が P の関係であるため、非本質的謝罪の対象となり *Przepraszam* や *Przykro mi* といった言語表現が現れるということになる。これに対し [14] と [15] の例は、実際に状況を変える行動に移らざるを得ない極限の場面における謝罪として捉えることができる。電話に出るため会話を中断するというやむを得ない状況であるため、言葉で謝罪の気持ちを伝えているのである。電話に出る際、謝罪表現が用いられる例は P の関係における非本質的謝罪でも多く見られたが、P の関係では電話以外の原因で [12] や [13] のような非本質的謝罪があったのに対し、T の関係ではこの電話以外の原因で非本質的謝罪が表現されている例はごくわずかであった¹⁶。

英語の *sorry* から派生した表現に関しては、T の関係に限ってその発言が観察された。図 2 の⑥でも確認できるように P の関係でこれらの表現が用いられることはなく、T の関係でも特に若者による使用に限られていた。これは本稿ですでに紹介した先行研究でも指摘されている内容であり、今回調査で扱った最新のドラマでも実際にその傾向が見られることから、いまだ廃れていない若者の謝罪表現として扱うことができよう。

「謝る」という意味の動詞 *przepraszać* を含まない表現は、今回収集したセリフデータの中で特に目立って件数が多いという結果には至らなかったが、先に挙げた *przykro mi* 「お気の毒ですが」や *wybacz* 「許して」といった表現の他にも次のような例が見られた：

[16]

Kobieta: *To moja wina. Za dużo powiedziałam.*

女性：（法廷で感情的になりすぎて弁護士に対して余計な発言をし、裁判に負けてしまったことを受けて）私のせいです。しゃべりすぎました。

【Magda.M 第 27 話】

[17]

Prezes: Ja powinienem przyjść do pani z kwiatami.

社長：(自分の勘違いで不利を被った秘書に対して)花を持ってあなたを訪ねるべきなのは僕です。

【BrzydUla 第4話】

[16]の発言は、自分に非があることをはっきりと伝えることで謝罪の意図を伝えている。動詞の *przepraszać* を直接用いる表現ではないが、自分が悪いと断言した上で謝罪の内容にも言及している点で、誠実な謝罪表現として捉えることが可能である。[17]の例では特に謝罪を直接伝える表現が用いられておらず、言語形式だけではこの発言が謝罪表現であると判断し難い。しかしこの発言に至るまでの状況(自分の勘違いが原因で、社内において不利を被った秘書の家にわざわざ出向くという流れ)をふまえると、この「花を持って訪ねる」という行動が謝罪の象徴になっていると捉えることができる。この後に続く場面で秘書の父親が「社長が謝りに来た」という内容の発言をしていることから、ポーランド社会においてこの「花を持って訪ねる」という行動が謝罪方法の選択肢として認識されていると捉えることができよう。

3.1.3. 人間関係と場面の公私

もうひとつ、場面の種類(公的・私的)と人間関係(Pの関係とTの関係)がどう交わっているかということについて考えてみたい。今回の調査では、図2・図3の数字からもわかる通り、Pの関係では謝罪の場面は公的な場面である場合が多く(図2:合計44件のうち「本・公」15件と「非・公」21件で計36件)、一方でTの関係においては謝罪の場面が私的である場合が多かった(図3:合計84件のうち「本・私」45件と「非・私」13件で計58件)。これは公的・私的の層がPの関係とTの関係にそれぞれ対応しているという Marcjanik の指摘(2001: 288)にも一致する内容である。もちろんこの対応関係に当てはまらない例も存在するため絶対的な法則とは言いがたいが、少な

くともこの謝罪表現における傾向として、Pの関係は公的な場面と結びつき、Tの関係は私的な場面と結びつく例が多いことは確かであると言えよう。

3.2. 罪の意識と文化としての謝罪

ポーランド語の謝罪表現においては、その謝罪の程度、また謝罪をする本人がどのくらい罪の意識を感じているかに応じてその言語形式が多様に変化する。Jabłoński(2016)はこの罪の意識について、ポーランド語と日本語の謝罪表現を対照させたとき、明確に浮かび上がってくる相違点が発言者とその受け手の立場にあると指摘した上で、その背景にある文化的違いを説明している。ポーランド語のコンテキストでは謝罪の場面でお互いが対等な立場にあるため、非のある方が謝るのに対し、日本語では上下関係が大きく影響するため、たとえ非が無くとも立場が下であれば謝る(Jabłoński 2016: 247-248)。ポーランド人にとって謝罪は過失が生じた状況の解決方法として選択される言語行動で、その責任は過失を犯した本人に向けられるという完結したプロセスであるのに対し、日本人にとっては上下関係が優先されるため必ずしも謝罪を言語で表現する人物とその原因となった人物が一致するとは限らないのである。この Jabłoński(2016)が指摘している「とりあえず謝る」という日本の言語文化の特徴は、ポーランド語のみならず他の言語と日本語を対照させた研究でも同様に言及されることが多い。相原(2007)は日本語と中国語の謝罪表現について、中国語ではとにかく前置きとしての言い訳が長く自分の立場を守ることが優先されるのに対し、日本語ではむしろ先に謝った方が楽になる、できる限り早く謝った方が早く解放されるという認識が存在することを指摘している(相原 2007: 25-27)。また日本語と英語の対照研究で謝罪を扱っている清水(2015)は、英語での謝罪表現に理由や状況の説明が多く含まれるのに対し、日本語ではシンプルに謝罪の表明だけで済ませる場合が多いという違いを取り上げ、これは謝罪の理由や状況説明が日本語のコンテキストでは言い訳や弁解とし

て受け取られるためであると述べている（清水 2015: 30-32）。

ではこれをふまえて、もう一度ポーランド語の謝罪表現について考えてみたい。本研究でのセリフ分析からもわかる通り、ポーランド語の謝罪表現は相手との関係がPの関係であるかTの関係であるかによって、その謝罪表現の形式や長さが変化する。そのため言い訳のような説明が常に現れるわけではなく、特にPの関係ではいわゆる清水（2015）が指摘している日本語の謝罪のようにシンプルな言語形式を取ることが多い傾向にある。ただし場合によっては追加説明が見られる例も存在するため、一概に言い訳や弁解を避けているとも言い難い。

日本語社会の風潮として指摘されている、上下関係が最優先となり、先に謝った方が勝ちといった謝罪の文化についてはどうだろうか。今回の調査で収集したデータの中に、立場が下であるがゆえに謝っているという例は見られず、秘書と社長、新人弁護士とその上司といった上下関係が見られる中でも、あくまで過失をおかした本人が謝るという前提が存在している。場面の公私に応じてその前提が崩れる例も特には確認できず、Jabłoński（2016）が自身の議論に持ち込んでいるこの点において、ポーランド語のコンテクストでは確かに日本語とは異なる謝罪文化が存在すると言えよう。

4. おわりに

本研究は、ポーランド語でコミュニケーションを取る際に相手への敬意を示すにはどのような表現を用いたら良いのかという筆者の疑問が原点となっている。この疑問を解決すべく、本稿ではポーランド語の「礼儀」に焦点を当て、ポーランドにおいてこれまで行われてきた社会言語学的研究の立場を取り入れながら実

際の言語資料にもアクセスすることで、理論的な側面のみならず実践的にコミュニケーションの現場で用いられている言語表現についても考察することができた。

ポーランド語の「礼儀」において最も大きな役割を担うのは人称表現であり、人称詞によって設定されるPとTの関係が場面の公私とともに言語形式に影響を与えることは、本稿第2章で取り上げた先行研究の内容からも読み取ることができる。第3章では具体的な言語行動として謝罪を取り上げ、主に相手との人間関係（PもしくはT）、また謝罪の種類や場面の公私によりその言語表現にどのような違いが見られるのかについて、それぞれ分析および考察を行った。実際の言語資料を通して先行研究での指摘内容と一致する部分も確認でき、ポーランド語を通して見えてくる人間関係や社会規範に関する一面を記述することができたのではないと思う。本研究では言語資料としてテレビドラマから収集したセリフデータを用いたため、あくまで脚本家の意図が反映された表現となっており必ずしも自然な会話とは言い難いが、ポーランドの言語文化社会で生活する視聴者に向けられた作品である点を考えると、社会的に受け入れられている表現が収集できたと筆者は考えている。

謝罪文化について日本語のコンテクストと対照させ、謝罪という言語行動を通して見えてくる日本語とは異なったポーランド語の「礼儀」についても考察を試みたが、ここでは具体的な言語データを提示しながらの検証にまでは至らなかった。この点に関しては今後の課題とし、日本語との対照分析を充実させた議論へと発展させたい。

本研究を通して、ポーランド語学習者をはじめポーランド語の「礼儀」について興味や疑問を持つ人々の理解に少しでも貢献できれば幸いである。

参考文献

〈引用文献〉

- Brown R., A. Gilman, 1960, *The Pronouns of Power and Solidarity*, [in:] T. A. Sebeok (ed.), *Style in Language*, Cambridge: MIT Press, pp. 253-276
- Handke K., 2008, *Socjologia języka*, Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN
- Huszczka R., 1980, *O gramatyce grzeczności*, Pamiętnik Literacki 71/1, s. 175-186
- Huszczka R., 1996, *Honoryfikatywność. Gramatyka. Pragmatyka. Typologia*, Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN
- Jabłoński A., 2012, *Honoryfikatywność japońska : semiotyka a pragmatyka*, Kraków: Wydawnictwo Uniwersytetu Jagiellońskiego
- Jabłoński A., 2016, *Wina a niefortunność – o przeprosinach po polsku i po japońsku*, *Tertium Linguistic Journal* 1 (1&2), s. 244-251
- Jabłoński A., 2017, *Wewnątrz i na zewnątrz kultury. Komu potrzebna jest „grzeczność”?*, *Tertium Linguistic Journal* 2 (1), s. 129-141
- Kielkiewicz-Janowiak A., 2011, *Child to parent address change in Polish*, [in:] Jahr E. H. (ed.), *Language Change: Advances in Historical Sociolinguistics*, pp. 45-66
- Łaziński M., 2006, *O panach i paniach. Polskie rzeczowniki tytułowe i ich asymetria rodzajowo-płciowa*, Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN
- Marcjanik M., 2001, *Etykieta językowa*, [w:] Bartmiński J. (red.), *Współczesny język polski*, Lublin: Uniwersytet Marii Curie-Skłodowskiej
- Marcjanik M., 2005, *Grzeczność nasza i obca*, Warszawa: Wydawnictwo Trio
- Marcjanik M., 2006, *ABC grzeczności językowej*, [w:] Bańko M. (red.), *Polszczyzna na co dzień*, Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN
- Marcjanik M., 2007, *Grzeczność w komunikacji językowej*, Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN
- Marcjanik M., 2014, *Słownik językowego savoir-vivre'u*, Warszawa: Wydawnictwa Uniwersytetu Warszawskiego
- Ożóg K., 1990, *Zwroty grzecznościowe współczesnej polszczyzny mówionej : (na materiale języka mówionego mieszkańców Krakowa)*, Warszawa / Kraków: Państwowe Wydawnictwo Naukowe
- Ożóg K., 2001, *Polszczyzna przełomu XX i XXI wieku. Wybrane zagadnienia*, Rzeszów: Wydawnictwo „Otwarty rozdział”
- Tomaszkiewicz T., 2005, *Grzeczność francuska na tle koncepcji grzeczności językowej*, [w:] Marcjanik M. (red.), *Grzeczność nasza i obca*, Warszawa: Wydawnictwo Trio, s. 11-24
- Tomiczek E., 2005, *Grzeczność nasza i niemiecka*, [w:] Marcjanik M. (red.), *Grzeczność nasza i obca*, Warszawa: Wydawnictwo Trio, s. 43-68
- Wojciechowski B. T., 2011, *Nadawca i adresat w języku japońskim. W kręgu semiotyki kulturowej i pragmatyki komunikacji*, Kraków: Wydawnictwo Uniwersytetu Jagiellońskiego
- 相原茂 (2007) 『感謝と謝罪：はじめて聞く日中“異文化”の話』講談社
- 清水崇文 (2015) 「英語から見た日本語の発話行為－謝罪・感謝の基底にある『負い目』『いけないという気持ち』志向－」『日本語学』第34巻3号 明治書院 pp. 28-37
- 早坂眞理 (2019) 『近代ポーランド史の固有性と普遍性：跋行するネイション形成』彩流社

〈辞書〉

- Imny słownik języka polskiego*, red. Bańko M., wyd. I, Warszawa: PWN, 2000
- Nowy słownik języka polskiego*, red. Sobol E., wyd. I, Warszawa: PWN, 2002
- Praktyczny słownik współczesnej polszczyzny*, red. Zgólkowa H., wyd. 1, Poznań: Wydawnictwo KURPISZ, 1994
- Słownik etymologiczny języka polskiego*, red. Brückner A., wyd. III, Warszawa: Wiedza Powszechna, 1974
- Słownik synonimów polszczyzny*, red. Kurzowa Z., wyd. III, Warszawa: PWN, 2002
- Uniwersalny słownik języka polskiego*, red. Dubisz S., wyd. I, Warszawa: PWN, 2003
- 『学研国語大辞典』初版、金田一春彦・池田彌三郎編、学習研究社、1978
- 『角川類語大辞典』、大野晋・浜西正人編、角川書店、1992
- 『広辞苑』第7版、新村出編、岩波書店、2018

『新潮国語辞典』第2版、山田敏夫・築島裕・小林芳規編、新潮社、1995

『新明解』第7版、山田忠雄・他編、三省堂、2012

『大辞泉』第2版、小学館、1998

『大辞林』第3版、松村明編、三省堂、2006

『日本国語大辞典』第2版、小学館、2000-2002

『明鏡国語辞典』第2版、北原保雄編、大修館書店、2010

〈コーパス〉

NKJP: Narodowy Korpus Języka Polskiego <http://nkjp.pl/> (最終閲覧: 2020年10月15日)

KJPPWN: Korpus Języka Polskiego PWN <https://sjp.pwn.pl/korpus> (最終閲覧: 2020年10月15日)

注

- 1 日本語では「グジェチュノシチ」。
- 2 定義検証の際用いた辞書とコーパスについては、参考資料一覧に記載有。
- 3 英語の *honorific modification* に相当する語としてポーランド語には *honoryfikatywność* という語があり、ポライトネス研究では「情報」としての捉え方が基本である (Jabłoński 2017: 132)。ポーランド語の *honoryfikatywność* という語については「言語テキストの発信者と受け手の社会における人間関係を示す情報」(Huszczka 1980: 175) や「適切なコミュニケーション行為を行うために、それぞれの状況に応じて使い分けられる発言の様式」(Jabłoński 2012: 79) などの定義が与えられており、「情報」や「様式」といった要素を強調している点で *grzeczność* とは区別されている。この *honoryfikatywność* はポーランドにおける日本語研究の議論で用いられることも多く、日本語はこの *honoryfikatywność* が文法化されている (Wojciechowski 2011: 215) ため言葉の「礼儀」がポーランド語と異なるという捉え方が、ポーランドの日本語研究では主流となっている。
- 4 ロシア語やチェコ語では、二人称複数形をもって敬称とする。
- 5 グロスの表記方法は Leipzig Glossing Rules (<http://www.eva.mpg.de/lingua/resources/glossing-rules.php>) を参考にし、筆者が適宜変更を加え以下のようにした。ACC=accusative, F=feminine, IMP=imperative, IMPF=imperfective, M=male, MP=male-person, NOM=nominative, PAST=past, PF=perfective, PL=plural, PRES=singular, 2=second person, 3=third person。なお、グロスの表記は議論に必要な部分にとどめた。
- 6 Łaziński (2006: 40) が例として挙げている文を動詞の二人称変化と三人称変化の両パターンに筆者が改編した。
- 7 PWN: 国立学術出版所 (Państwowe Wydawnictwo Naukowe) の略称。
- 8 19世紀のポーランド人哲学者であり貴族の出身であったユゼフ・ゴウホフスキ (Józef Gołuchowski, 1797–1858) は *chłop jest ciałem, a pan duszą* 「農民は肉体であり、地主は魂だ」という言葉を残している (早坂 2019: 314) が、彼の言葉からもこの *pan* という語が当時の地主 (ポーランド貴族シュラフタ) を指す語として用いられていたことがうかがえる。このようにかつて肩書表現として用いられていた *pan* と *pani* が、結果的に現代ポーランド語の語彙として残り、今日の用法にとどまったのである。
- 9 例えば男性名詞 *sekretarz* が社会的に一定の地位を持つ「秘書官」を表すのに対し、この女性形である *sekretarka* は「事務員」としての「秘書係」を表す語に過ぎない (Handke 2008: 152)。
- 10 2019年11月、ポーランドの正式な国会文書に女性議員を男性議員 *posel* と区別した *posłanka* の表記が初めて印刷された。参考記事: <https://wiadomosci.gazeta.pl/wiadomosci/7,114884,25446512,marszalkini-elzbieta-witek-przychylila-sie-do-prosb-lewiczy.html> (最終閲覧 2020年8月14日)
- 11 ポーランド語における敬称と親称の表記にそれぞれ P と T を用いる例は、Kielkiewicz-Janowiak (2011) の記述にも見られる。
- 12 代表的なものとしてフランス語との対照 (Tomaszkiewicz 2005) やドイツ語との対照 (Tomczek 2005) などが挙げられる。

- 13 作品の選定に際しては次の条件を設定した：時代背景が現代であること；内容が日常的で現実離れしていないこと；言語的に特殊でないこと（専門用語や方言などが目立っていないこと）；会話が自然であること；視聴者の支持を得ており、シリーズが長続きしていること。これらの条件を踏まえた上で、さらに本研究で特に分析基準となる場面の公的・私的、またPの関係とTの関係をドラマ内の発話からより明確に判断するため、家庭内の会話（場面が私的かつTの関係が多い）・ビジネスの場面における会話（場面が公的かつPの関係が多い）という二つの基準をもとに、rodzinka.plの14シーズン（第1話～第13話）・BrzydUlaのシーズン1（第1話～第15話）・Magda M.のシリーズ2（第16話～第30話）から言語データを収集した。
- 14 Marcjanik（2014: 243-257）はこの*sorry*から派生させてポーランド語特有の形を応用した謝罪表現を多く紹介している：*sorcia, soreczki, sorunia* など。
- 15 呼び止め・前置きで用いられる動詞 *przepraszać* に謝罪の機能は無いとしているが、セリフを聞き取る際にこの動詞の役割を考えながら取舍選択することが困難であったため、ひとまず聞き取りデータとして収集した上で、改めて機能を分析し表に反映させた。
- 16 とても急いでいるため会話に参加できない、会話の途中で席を外さなければならないなどの場面でも同様の謝罪が見られたが、割合としては少なかった。